みずうみメルヘン

岡崎　佑哉

１．葉月Ⅰ

湖を見下ろす国道は都市部からようやく２０キロメートルばかり離れた位置にあったが、トンネルを抜けて山を削ったここまでくると一転、既に山里の臭いしかない。しかも深山幽谷の魅力があるわけでもなく、朝夕の一時、小さな駅前と僕が住む国道の分岐点のあたりはものすごいラッシュになる。

もともと淵のように澱んだ田舎の空気の中で、前にも後ろにも進めず生ガス臭い溜め息をつく営業車の長い行列。だがもっとも情けないのは日頃この風景に慣れ切って、排ガスを一度ならず直撃されながら高校三年生の今まで学校に通い続けてきた僕なのかもしれない。

本当は文句なんて言えた義理じゃない、僕の家はこの交通量の多い、客つきのよい土地をその時々の要望に応えて商売人たちに高く貸して生き延びてきたのだし、僕もこれを引き継いで一生引っ張るしかない。『アイドリング様ありがとうございます、万年地震の大地殿、今後ともひとつよろしくお願いいたします』ってなわけだ。

五年前にラブホテルが中古車屋の隣を借りた。瞬く間に完成したそれは今風のすっきりとした五階建てで、中学生の僕は『これだいじょぶかいな』と思ったものだ。だって形ばかり湖畔の景勝地、その実値打ちゼロのこの辺りはまさにモーテル銀座でございましたから。

車を小部屋の下の車庫に突っ込んで、女の人の腕を取って階段を上るあのうさん臭い施設は、法律の改正でかなり前から新しく建てることができなくなっている。普通のホテルに似た形式の通称『ファッションホテル』なら比較的自由に建てられるのだが、そうなると駐車場と廊下は客同士の鉢合わせが頻繁だ。親子、師弟のご対面だってありうるではないか。成り行きでやけくそのセックス遊びには、やはりそれなりの形が必要なのだ。

ところがこのお上品なホテルはなかなかに善戦していた。一歩先行くカップルを気取りたい田舎のつがい、面白半分の女子大生グループ、果ては週末に一泊旅行で家族を煙に巻こうと目論む、仕事に追われて予定のたたないお父さんたちまで取り込んで、要は儲かったからホテルの名前や外装、経営者が変わることは今日までなかった。

二年間、本社のスーパーバイザーが徹底的に経営を固め、入れ替わりに住み込みの老夫婦がやってきた。

「少しでも妙な動きを見せたら私どもにお知らせください」目の吊り上がったスーツ姿の正社員が去り際にそう言い残したから、わけありであることはわかった。しかし三年たった今も彼らは悪いことはおろか、仕事以外に何一つできないでいた。

この老夫婦にはどのような関係か葉月という体の不自由な少女がいて、養護学校のバスが今朝も拾いに来た。ここが始発だそうで、エアサスの空気を抜いてゆっくりと車高を落とした広い入口にステッキを突いてよじ登り、乗り込んでいく。

ほくは葉月が先生の介助から自立し、はいずるのをやめ、段ごとに膝をつかないようになっていく三年間を毎日見送ってから、逆方向の駅に向かった。

電車の中で制服のネクタイを締めながら、体を動かすのが最も辛い身で僕より二十分も早く、遠い学校へと送られていく葉月を思った。いくらＡＤＬ＝日常生活動作とやらを真面目に練習しても、ちょっとした拍子に体がひきつり、身体障害のポーズが周囲にさらけ出された。葉月はそんな時、緊張のあまり否応なく「障害児の笑顔」を作ってしまう。楽しくもないのに表情が笑顔っぽく固まってしまうという、あれだ。

初めて出会った春にはまだごわごわの制服を来ていた葉月は、もう高等部…巷で言うところの高校生だ。そのはがゆさ、もどかしさは肌が痛くなるほど伝わってきた。

でも僕は同情を持ち合わせない。加えて障害に真剣に、日々立ち向かう少女への感動もない。たかだか十八歳の僕の心から、屈折どころか感情が失われていた。

いつも、水没した湖底の村に閉じ込められていた。いやむしろその生まれ育った時空の断片に覆い被さり、隠蔽するために心をちょっとでも動かすことができずにいた。

ところがだ、葉月とはその日の帰りにも会うこととなった。というより、門の前で待ち伏せされたのだ。

「あれ、おばあちゃんは？」

「仕事だから、葉月一人」その時、初めて葉月を間近で見た。

『そっか。年齢は高校生だけど化粧してないんだ。それでこんなに幼いのか。それでいてこんなにかわいいのか』

玄関に上がると、奇妙に遠回りなやり方だったけど壁にもたれながらステッキの足を拭き、真剣な面持ちで腕を伸ばし、細かく震える指先で脱いだ靴をそろえて家の敷居をまたぎ、階段を見てから僕を見上げ、

「階段は練習中なんです。抱いてください」と言った。見上げるくっきりした瞳によく似

合う、弓なりの、気の強そうな眉毛だ。
葉月の体は中学校のボランティアで介護した子供たちとは違い、枯葉のように軽いわけでも、丸太のように重いわけでもなく、ただ息づく肉体だった。肩に葉月のあごがきゅっと食い込む。
「どうして僕の部屋が二階だと？」
「私がバスに乗り込むときに、いつも見ていてくれたから」
「目、いいんだ」
「見えているのは左目だけですけどね」
「でも…悪いけど僕、意識して見ていたわけじゃないよ」
「いつも学校に行く前に習慣で見ていたんでしょ。でも、体の不自由な女の子が何とか工夫してバスに乗り込んでいくのをありのままに見ていてくれたのはきみだけ。みんなはかわいそうな生き物を受け渡ししていただけなんだから。少し上手に体を動かせるようになったとしても、気づく人なんていなかった。葉月はきみの視線を一人でうれしく思っていただけ。きみが気にすることなんてない」
なんて明るい、賢い子なんだろう。ボランティアで葉月の通う養護学校を訪問したき、大多数の子供たちはただ車椅子を押されながら、意識すらなかった。体が動かない子供たちの多くが、単に知的障害というよりもはるかに重い脳そのものの障害を伴っていることを、その時初めて知った。だから葉月は本当に例外だった。
僕は異性との肉体関係はわりに派手にやっているほうだったけど、その僕から見ても葉月に障害児としての容貌のデメリットはなかった。
もしそれが小学部一二年生クラスだと、例え喉に痰吸引用のパイプが刺さっていたとしても、彼女らは母親が美しければ、おおむねそれに倣って美しい。だが人数がぐっと減る中学部になると、常にひきつっている子、頭が曇り、顔の表情が変えられない子はそれぞれの苦しみを顔に刻み込むようになる。ホルモンが狂う子は暗い肥満に歪み、体を動かせない子は傘の骨のようにしんなりした骨と、黄ばんだ皮だけの姿になっていく。
葉月はクラスの少女たち以上にすべすべで、ねじれながらしなやかに引き締まっていた。
「薬臭くないよね」
「ええ？」
「ああいう学校の子って、薬の臭いがするから」
「葉月もたくさん飲まなくちゃならないよ」

「でも、臭わない…」抱きしめた体からは、春の初めに生える若草のような、年頃の少女の匂いがむせるように立ちのぼっていた。

部屋の真ん中に葉月を座らせて、僕は立ち上がった。

「じゃあ、ジュースでも持ってくるね」

「あればすいかサイダーがいい！」元気のいい声を聞きながら、未熟な僕はもう元気な爽やかさじゃなく、悩ましく湿った気持ちによろめいていた。『いくら利発な女の子であっても、社会から特別扱いされる少女に手を出せば、世間が黙ってはいまい……』物思いに沈みながら扉を開けたとたん、葉月が床に音を立ててしりもちをつき、背中から倒れこんだ。

「うわ！」危うくジュースをこぼしそうになりながら、僕は大の字に仰向けになった葉月に駆け寄った。

「具合悪い？」

「そうは見えないでしょ」葉月はからからと笑いながら、

「こうやって仰向けに転ぶとね、葉月本来の力じゃ起き上がれないんだ。でもほら、このステッキを使うとこうやって……こうやって……こうやってこうやって、最後にこうやって起きられるの。だからね、起き上がるのはスポーツみたいで楽しい。みっともないとも、恥ずかしいとも思わない」白い歯を見せてから、頬を染めた葉月は大きな目で誘うように僕を見上げた。僕は吸い寄せられるように、葉月の両手を取った。

「そんなにさ、無防備だとキスしちゃうよ」

「きみがしてくれなきゃ。葉月からはできないよ、そんなに自由は利かないから」唇を重ねると、舌を入れてきたのは葉月のほうからだった。夢中で吸い上げる。甘くじんじんした痺れが来るのは、僕の体が葉月の体を求めている証拠だ。それもちょっとない激しさだ。

ちゅっと音を立てて唇を離すと、口許がうっすらとほころんだ、とろんとした顔が『何して遊ぶのかな？』って僕を眺める。しっかり、僕とことを楽しんだ同年代の少女たちと同じ種類のイキモノになっている。

「熱い……気持ちも、体も」汗だくでハアハアときめき、力んでふうふう体を支え、二つの緊張に壊れそうな葉月に、情け容赦なく唇を何度も重ねた。

「むうう！」葉月が突然目を丸くしてうめくから、あわてて唇を離した。

葉月は肩で息をつき、胸の先と股間を両手で押さえながら僕を横目で見た。

「準備できてしまいました」緊張と弛緩の表情の間を揺らめきながら相手の心を奪いつく

すやり口は、白黒映画の名女優たちのようだ。
「葉月ちゃんって」僕は一瞬頭が真っ白になり、次の瞬間には葉月に覆いかぶさっていた。
「どうなの、できる体なの？」葉月は『ついにきた』っていう抑えがたい恐怖に目をしばたき、喉を詰まらせながら
「右の胸は麻痺しているけど……他は」ブラウスのボタンを外しにかかる僕の手に細長い手を重ね、
「お願いだから全部脱がさないで、見て欲しくないところがとても多いから」
「僕は……いいのかな」
葉月は何度もうなずいて
「先生たちのも見たことないけど、見せて、見たい」ゆっくり脱いで、気の済むまで恥ずかしい立ちんぼをした。裸の胸に頬をすりつけられ、まつげが乳首をくすぐるともう、僕自身があまりの勃起に硬直し、苦痛と快楽の中で顔を歪めていた。
何度か探りを入れてから一気に腰を沈めた。葉月の体は僕を根元まで、力いっぱい受け止めた。
「あああ！ああ、あああ」よく動くほうの片足を僕の背中に乗せ、細く切ない声で女の子が乗り越える最初の痛みを歌う葉月の上で、僕は
「安心して、僕がゆっくり動くから」と言いながら、目を閉じて唇をかむ葉月の頬に、既に汗を落としていた。
沸き上がる激情に息を止めて耐え抜き、葉月の中をそっとかき回しながら、耳の奥に遠く、激しい水音が響いてきた。
湖底に沈む前から既に黒ずみ、揺らめいていたあの村の夏の情景が、葉月と同じ臭いを持つクリーム色の少女、亜梨歌の記憶に伴って鮮明に僕の心に舞い戻ってきた。
十一才……同い歳の、同じクラスの、美しい栗色の髪を持つ少女、吊り橋から足を踏み外した僕を見殺しにしようとした少女が、全く鍛えられていない細い腕で橋のふちにぶら下がって揺れる僕を厳しい目で見下ろしていた。澄みきった上流の川音が遙か下方で招いている。涼しい闇の世界が迫っていた。

2．亜梨歌Ⅰ

助けて――
「いやよ、くさいんだもん」クリーム色の少女、亜梨歌は振り向きざまにそう言った。そ

してそれは当意即妙の悪態でもなんでもなく、僕がその学校で叩かれ続けた陰口のリフレインに過ぎない。僻地の怖さとは、貧しさなどではなく、実にこういった『冷たさ』にある。僻地の『豊かさ』のほうについては貴方たちのほうがお詳しいでしょう。この集落もまた、まじめに金を稼いだ都市から吸い上げられた税金のなかから、意味のない『地域振興』名目の補助金を最大限泣き落としで引き出し、豪華な橋や生活館、完璧に整備された村道を次々と建設していったのだ。

一方冷たさのほうは都会以上だ――確かに僕は、その百を切る戸数の、駅から急な坂を下りて徒歩二時間かかる集落で、外部の文明社会、村人自身というよりもむしろ地域におもねる無能教師たちによって利己主義で軽薄と決め付けられた汎用の社会にばかり目を向け、集落の形骸化した地域社会や子供会なんぞに一切興味を持たなかった。

市販最初のテレビゲーム『ゲーム１５』は、今の感覚では不細工な長方形にすぎないボール一つで新嘗祭の踊りを凌いでいたものだ。現在とは違い若い世代のカルチャーを総合的に支配していた二大カルチャー誌が滔々と語るプレッピーの経緯やスーツのディティールは、開村百五十周年の開拓史など問題にならない重さを有していた。

若い日々を太陽族まがいでならし、僕以上に内面は気取り屋の都会派指向な人だった両親は、僕とは異なり当面何とか世間と歩調を合わせていた。だが二人とも頻繁に転居を企てては、同居の祖父の一喝だけで、黒ずんだ村の貧しい大地に縛りつけられていたに過ぎない。そういうことだ。だが祖父とて年齢から見ても、僕まで縛ることはできない。

延々と続く森が何だと言うのか。そこに幻想と夢が溢れているというのなら、電力会社や営林署の職員たちは常に酔っ払ったような仕事しかできないはずだろう。森は人間などいっかな求めてはいない。だから人間の方も、森を敬して遠ざけておくのが礼儀ではないか。

こういった僕の利己主義に、村の子供社会は必要以上の報復を加えた。僕の周囲には挨拶も会話もなかった。夏休みに一丁前に原宿市竹下町……彼らは『原宿』が特別区にあることも、地名ですらないこともご存じないから……に家族で赴き、おどおどした恥ずかしい振る舞いでまともな人々に散々迷惑をかけて購入したであろう、この県の市部にだって普通に売っている旅行のお土産が、僕に分けられることはついになかった。まあこういう事例を一々羅列していると、あの売名行為の『元いじめられっ子の告発』と同レベル――考えてもみたまえ、本当に優しく弱い人間なら、告発自体できないはずだ――になるので止めておこう。

最悪なことに、毎日続く無数の嫌がらせは巧妙に一線を守っていた。さすがは仲間集団の知恵を身につけた連中だ。この人間関係を担任が認め、学校が認め、地域社会に認めさせた。しかもこれは都会の疎外ではない。たった十四人の小学五年生クラスの中の『村八分』なのである。

「いやよ、くさいんだもん」この気取り屋で空っぽの少女に相応しい紋切り型の発言が、こうしてじわじわと彼らが削り取っていった僕の生存本能を完全に破壊した。

「そうかい、そうだろうな」と僕は落ちついた声で言い、まだ十分に余力の残っていた手を放した。

かけらほどの恐怖も起こらなかった。消えていく感覚、すべてが受け入れられる予感は、亜梨歌の甲高い悲鳴と蛇のように絡み合い、物凄いエクスタシーとなって全身を陶酔させた。その手を、駆けつけた髭面の美術教師ががっしりと掴んだ。

写生会といえば一年生のころから憂鬱だった。年に三度もあるこの特別活動は、山に魅せられていっかな異動希望を出さない髭面の大都会育ちの美術教師によって、プロポーショナルなランドスケープを研究し尽くされ、彼の指導は僻地の小さな小学校とは思えない程高度だった。何度も全国レベルの表彰を受け、彼の活動はもはやつまらない学校教育には収まらなかった。

だがぼんやり眺めていれば幾らでも時間をつぶせる山々が、いったん写し取るとなると絶えず風に震えるその複雑で曖昧な曲線で僕を困らせたのだ。僕は建築基準法ぎりぎりに整然と立ち並ぶビルや、複雑に絡み合う高架道路と整理しつくされた標識やレーン、そういった効率的で明快なものが描きたかった。曖昧な曲線なんて写し取るのは、自らの不完全なやっつけ仕事に耐える力のある大人か、または何冊もの設計書にぎっしりとベジェ曲線の方程式を書き込むエンジニアの仕事だと感じていた。画板と絵の具セットを抱えての遠征で、僕はいつも末尾を、首を振り振り歩いた。

少し前を、亜梨歌が歩いていた。山の娘特有の、骨太の顔だちがなぜだか美しく映え、林業協同組合の理事である父親の権勢を傘に着た力技の令嬢。実は余り頭が回らなく、その代わり既に女として申し分のないはみ出た肉体を持つことで、もったりとした田舎臭さをさらに際立たせている亜梨歌。

亜梨歌は決して四季に左右されない、寒さに赤らむことも日焼けすることもないクリーム色のつややかな肌を肩や太腿まで露出していた。この肉感的でやや愚鈍な少女が、地域

社会では文句のつけようがない、優等生の雛形に祭り上げられるのだ。
僕はその日亜梨歌の後ろを歩きながら、『曲線も女のならいい』と思った。そして年齢にそぐわないその考えを裁くように、決して古くない吊り橋の手すりの紐が突然切れたのだ。

3．葉月Ⅱ

ハンカチでそっと拭うと、葉月と僕の間にうっすらと血が滲んでいた。健康な子たちより痛かっただろう。
「また手術してしまった」と葉月は、冗談とも本気ともつかない顔で体からしぼんだ陰茎が抜け出るのを見ていた。
自分で何とか服を調え、抱かれて玄関まで送られる。
「また来てもいい？きみ、葉月に飽きないかな？」
「うん、いいよ。今度は豪華なホテルもいいね」
「いや、ここが、私はいい」

僕は吊り橋の上に引き上げられながら、恥ずかしいくらいに混乱していた。結局僕は見殺しにされなかったのだ。それは非常に不条理なことだった。この腐った、無能な、依怙地な、黒ずんだ馬鹿集落で、僕に生きつづけさせようとする力が存在するなど信じられなかった。
「僕はフケツじゃない！いっつもまいにち、カラダ洗ってるんだ！」生まれて初めての甲高い叫びは所々に裏声を交え、これ以上ないほどに惨めったらしかった。
かなり、頭にくるほど遅れて駆けつけた担任、この小中併置校の小さな職場の男性教師と人目も気にせず夜を楽しみ、行事で顔を合わせるごとに露骨な秋波を送る程度の貧しいメンタリティーを持つ肌の汚い女教師は、
「ココロが臭いのよ。自分にも原因あるんだから良く考えて。あ・な・た・は一生ここで生きるのよ」と凍りつくような声で言い放ち、語彙の乏しい彼女にしては精一杯の拙い比喩に酔い、教員採用試験の成績に応じて飛ばされた僻地から抜け出て都会に異動する欲望だけを滲ませて恍惚と下向きの形の悪い胸をそらした。

4．恵美

自宅の又隣の小奇麗なホテルで、きんきん声の恵美とけだもののように吼え猛りながら、あのどろんと下を向いた乳首が見ていたものを、自分も見ていると思った。あの女教師は手近な男性教師と、今の二人のように激しく絡みながら、輪をかけて狂ったように激しく教員互助会の結婚相談所でお見合いを重ね、ついには県庁所在地の高校教師と話をまとめて、かつての愛人に後ろ足で砂をかけて村を出て行ったのだ。

鮮やかに、軽やかに。都合に合わせて、誰でもＯＫ。下を向いて生きれば、そういった『大人のやり方』即ち人生の安楽な切り抜け方が見えてくる。

恵美の胸の谷間は、強いコロンの臭いを漂わせていた。その調子で十五歳の長所も欠点も、万事自らの意思で消していた。大きな目でウインクして、僕の懐から肌を重ねるたびに金を引き出し、意気揚々と細い腰を振って行きたい場所に行き、買いたいものを手に入れていた恵美。普段は母親と団地でうずくまるしかない恵美にとって、ベッドは未来への踏み台にすぎなかった。

しかし一方で、味気ないきんきん声に生まれ育ちをダイレクトに反映した恵美は僕に賭けているようでもあった。中学校、いや小学校の頃から痴情沙汰だけで生きてきた恵美のこと、どうあがいても自分の総合的な価値に合わせて自然と取り巻きのレベルが決まってくることは学んでいた。恵美がご自慢の大きな目を見開いて周囲を見渡しても、掘り出し物や取っておきのお宝なんぞ見つかるはずはない。吊り合わない、無理をしている僕との関係は、うまくいけば『大当たり』の宝くじなのだろう。

……ことを終えて夢うつつに部屋の扉を開けると、心臓が喉元まで飛び上がった。三角巾をかぶり、ホテルのスタッフジャケットを着た葉月がわざとらしく、モップをステッキにして曲がり廊下の奥に消えたのだ。

「あら、やあね、どじな使用人」

「許してやれよ。あの体で働いてんだぞ」

「うん」恵美はエレベーターのドアが閉まるなり、唇を押し付けてきた。僕が別の女を思うのを知ってか知らぬか、背中に強く腕を巻きつけた。

ダム建設による村の水没が決定したのは、僕の転落未遂から一週間後のことだった。僕の家の広間で、回り持ちの寄り合いが開かれた。

酒と煙草のむせるような空気のなかで、僕は旨そうにオレンジジュースを飲みながら、さも会話がチンプンカンプンであるかのように装ってニコニコしていた。

「僕らが悪かったんだ」呻くように、亜梨歌の親父が言った。
「補助金にだまされ、すっかり根回しされていたことに気づかなかったんだ……昨日、えれぁ写真家とジャーナリストが来たよ。そしてそっと教えてくれた――ここに建つダムは、なんかムツカシイ情勢の変化で、長くても五年間しか使われねえらしい……百五十年のムラがよお、ウウッ……五年だ……」
「判は突いちまったで」
「おれんちもだ」親父の号泣の後から、数人の男たちのもらい泣きが聞こえてきた。
『バッカじゃないの』と十一才の僕は心の中で嘲った。だってそうでしょう？この男たちは、せいぜい五十年間しか生きちゃいないのだ。そのうち一丁前な口を利いて村のために力になったか、少なくともそう思い込めた期間など十五年間にもなるまい。残りの時間はこ汚い不良ファッションで違法改造車でもぶっ飛ばしていただろうものを、数字の上の百五十年など一体なんだというのだ？それとも教科書にでも残るような華々しい歴史が、このやっとこさ流れ者の開拓で根づいた薄汚い集落に存在するとでも言うのか？
オジサンたちの五十年生きた間には、個人的にもっと手ひどく裏切られることだって何度となくあったんじゃない。少なくとも僕の十一年間に、あんたたちのご子息に裏切られなかった月はないよ。さあて面白くなってきたぞ。滅多に見られない一大イベントだ。一つの場所が根こそぎ消えて、みんな街に引っ越すんだ。僕はここではこれ以上ないほどの苦しみを味わったけど、街ではどうかな？

5．葉月目

頬を膨らませながら、葉月は僕と、湖の船着き場を散歩した。ぶうらぶうらと体を揺さぶる仕草がどうしても怒っているように見えず、ただかわいくてそれだけに胸をえぐった。
「ねえ葉月、今付き合っている女の子と、次の日には手を返したように別れるなんてこと、この世の中ではできないんだよ」
「知ってるよおぉ？」語尾を上げて、また頬を膨らます。すれ違う地元の人々が、
「あらぼっちゃん、はっちゃん、こんにちは」といつものご挨拶を投げかけてくる。彼らにとって僕は可哀想な少女に時間を割いて遊んであげている奇特な篤志家であり、万が一ステディーであることを知ったところで猟奇的なゲテモノ食いを楽しんでいる好き者のご大尽様に過ぎない。葉月にいたっては判断力のない、人間以下の存在に過ぎないだろう。
世間が子ども扱いするとちょっと下唇をかんで悔しがり、すぐに僕の目を見上げて微笑

む葉月を、この僕はどうすればいいんだろう？

湖畔のフェンスにもたれ、葉月が淀んで揺らめく水面をステッキで指差した。

「この下に、きみの村が沈んでいるんでしょ？」

「うん。先生に聞いたの？」

「社会科でやったときにね。ねえ沈むの見て、どんな気持ちになった？」

「七年前のことだからねえ……」

実際に見ていたはずなのになぜか記憶に薄いが、秋口に、もみじやハゼノキの紅葉のなかで村はかつての住人たち、しかも既に隣町の住民となった罰当たりどもの前でしっかりと、完全に蹂躙され、水没した。買収された卑屈な村人たちは市の用意したこぎれいな公営住宅に家族一同、大層空虚な笑顔で喜びあい、前庭にしつらえられた巨大な恥ずかしい物置に農機具を詰め、それぞれあてがわれた代替地で通い樵をやった。

無用のダムが生んだ不定型の人造湖は、その汚い水に堪えられる程度の人種だけを今日まで引き寄せている。彼らは夏の熱い夜に近くの凡庸な地方都市から轟音をたてて湖畔に赴き、それぞれの時代の不法改造されたみっともない車のなかで、愚者の義務のような暗くぎこちないエッチを楽しんだ。今日に至るまで自殺者すら一人も出ない程に、それは退屈な水たまりだ。

「さようなら、苦悩のぼっちゃんよ」と、閉校式の後でさっぱりと髭を剃った美術教師は僕の肩に手を置いた。

「君が自然を怖れ、撥ね付けようと、それは一つの立派な感覚だ。でも感覚を守るだけじゃダメだ。現実と仲良くしなけりゃ、命がないぜ。春から中心地の高校に設置される美術コースに行けば先生だって、面白くもない美大受験用の授業をして父兄に納得してもらうんだ。いちいちこ汚いなどと、それを卑下している暇はない。ようはバランスさ。死のうとまで思う必要はない」

6．葉月Ⅳ

「ねえ、手伝うよ」

「だめ。見ていて。葉月はきみの、特別の女になってやるんだから！」スーパーの袋を提げて、突然玉子焼きを作ると言ってきたのは葉月だった。エプロンを着けるところまではまあよかった。だがその後狭いスペースでガスを使い、だしを取ってほうれん草をゆで、

灰汁を取って切り刻む頃になると、見守っていることすら辛かった。
葉月はなるほど少女らしいまっすぐな気持ちで、自分が僕の役に立つことを見せたかったのだろう。しかし僕は逆に、体に障害があることで、ちょっとした仕事が何十倍もの苦しみになる過酷な現実を見せ付けられたのだ。
学校で学んだのだろう、特殊な、自分の麻痺をかわす技能で、全身を使って調理を進めていく。だがそれは、健康な人々ですら音を上げるような、力と根気の限りを尽くしたやり方だ。骨がきしみ、くぐもった悲鳴を上げ、かすれた息を漏らしながら震える手で卵を割り、混ぜて四角いなべに流し込み、見事な焼き加減で玉子焼きを巻いていく。
「――これはうまい。全然文句がない」髪の先からぽたぽたと汗が垂れる。体を傾けながら正座の姿勢で待つ葉月は答える余裕もなく、息を弾ませながらうなずいた。
きれいに食べ終えてから、
「葉月もおいしくなったかな」とぐったり横たわる葉月の首に滴る汗を舐め取った。甘く重たい汗の匂いが全身を貫き、目が血走る。
「頼む、今日は中を見せて！」と服の襟に手をかけた。
「それはだめ。私を嫌いになっちゃう」哀願しながら、葉月はもう本気では拒まなかった。
そっと横たえ、脂汗を浮かべながらゆっくりと、葉月の現実を覆い隠す衣服を剥がしていく。そして、現実が僕の前にさらされた。
葉月は生き延びるために、首から太ももまであらゆる方向にこれ以上考えられないほどずたずたに切り裂かれ、縫い合わされていた。渓谷のようにへこんだ傷跡のすべてに、おびただしい量の汗が伝っていた。傷跡に唇を当て、舌で吸い取ると、葉月はS字を描いて歪む背中をきゅっとそらした。
「あっ、あっあっ、溶けちゃう……壊れちゃう、きみと肉ごとくっついちゃう」狂おしくのたうつ肉体を、折れないように抱きすくめてさらに夢中で舐め続けた。割れ目は泉のように汁を溢れさせ、陰毛がしずくを滴らせた。
小さなお尻を宝物のように抱いて、ゆっくり深々と差し込んでから、
「信じて、僕は葉月が傷だらけでも何一つ気にしない」大人びた表情で葉月がゆっくりとうなずき終えるのを待って、唇を吸いながら腰を動かした。奥がこすれると、二人とも我を忘れて顔を歪めた。長い時間をかけて、何度もぶるぶる震えながら楽しみ抜き、舌を絡めあいながらのぼりつめた。
葉月の言うとおり、この日肌をぴったりとくっつけて余韻に浸りながら、僕の中で葉月

が一番にのぼりつめた事実だけは認めざるを得なかった。葉月はもはや、自分自身よりも大切な存在だった。だが、どうやって葉月を処遇すればいいのか、うまいやり方は思いつかなかった。やはり世間の言う『可哀想少女』を愛人として、丁重に囲えばいいのか。そんなこ汚く見えるやり口が、僕という人間の限界なのか。

7．亜梨歌Ⅱ

さて――それから駅のある隣町の中心校に通うことになった集落の子供たち全員の中で、僕だけ割り振られた学級にすっきりと溶け込んで明るくなった。最後まで美術教師は的確な指導を行ったらしい。

家族レベルでも苦悩を湖に捨て去ったのは集落じゅうでうちだけだった。祖父は笑顔が絶えない新しい家の和室に移された仏壇の前で、落ち窪んだ目でうずくまり、『こんなことが許されるのか』と時折呟きながら、半年で位牌となった。まあ、邪魔者は消えるのが定めだ。許される云々の問題じゃない。

母親は僕が進んだ中学校ＰＴＡの役員になり、自然とともに生きて得た感性ハテナについて滔々としゃべりまくって、ぎりぎり都心に通うＪＲ依存の会社員夫に依拠した母親たちをけむにまいた。そのビヘイビアは彼女に特段敵意のない僕にすら吐き気を催させた。彼女は僕が物心ついて以来庭の草木から飼い犬まで人任せ、山菜もきのこも何一つ見分けられないのだが、インターネットから抜いたロハスやらビオトープやら、オーガニック食品やらという流行語を器用につなぎ合わせ、自然愛好家風のファッションとメイクで裏打ちしているのだ。商業出版の依頼まできて、有能な関西弁のゴーストライターがあんじょうしてくれた。来月は地方局のテレビに出演ですと。気が遠くなる。

父親のほうは転居前から既に、親の目を盗んで、街場の商売のやり方と各業種の長所短所を必死に学び取っていた。そうやって入念に下準備をしたうえで、こうべを垂れて時期を待っていたのだろう。先祖の土地が湖の彼方の一風景に帰したこの時こそ、父親にとって一世一代の大勝負だった。その一部始終を見ていた僕にとって、それはせせら笑うべき馬鹿地主の悪あがきどころか、見習うべき立志伝中の快挙であった。

手づるなど何一つ持ち合わせない身で、苦労して裏から役人に手を回し、湖に遮断された雑木だらけの山の代替地にしては実に素晴らしい、中央本線駅から1キロメートル、街外れでしかも幹線道路の分岐点沿いというまさに超一等地を二千五百坪得た。面積にして実に百分の一以下という代替地も空前絶後だったが、それ以上に土地の質は高かった。

すぐに銀行と組み、振動に堪えうる最高の整地と、化学工場でも作るのかといぶかしがられたほど太い水道やガスの配管に取り掛かった。借り手がつかなければ破産という投機だったが、工事中から五つの業者が次々と問い合わせてきた。祖父の罵倒で萎縮した体を、彼らとの打ち合わせでは傲慢に見えるほど悠然と伸ばし、胃薬を飲みながら耐え抜いた二年間で、彼はその後をのらくら暮らす一発逆転劇に成功したのだ。

立場が逆転したとはいえ相も変わらず仲間はずれにされていて、はっきりしたことは言えないが――他の殆どの家族は代わり映えしない代替地での仕事を続けながらも、やがてムラ共同体としての目標を失い、惨めな結末を迎えたように見えたのだ。閉校五周年の同窓会誌によると、他県に去った家族がわかっているだけでも二十家族を超えていたが、まさか勝算あってのことではあるまい。

中学二年、十四才になったばかりの土曜日のこと、文化人と実業家の間に生まれた子どもに仕立て上げられた僕は、新任の女の担任にドライヴに誘われた。清楚な印象は全くなかったが、それでも中学生が最も憧れる年齢の、色っぽく、余裕に満ちた爽やかな笑みを浮かべながら軽い会話を投げてきた。パントマイムに凝って、ギターを弾いて、モデルの真似事をやっていたらしい担任のどことなく暗い熱さに気づいた時、軽自動車の右ウインカーが鳴った。トンネルの手前の、一番寂しい場所の、そこだけはまずい新築のホテルだ。

何もかも教えてくれた。最後まで主導権を握られながらも、未知の世界の作業手順を一通り覚え、快感とはいいがたい物凄い刺激の中、どくどくと音を立てて弾けることができた。飛び上がりたい喜びを必死で抑え、

「もうこんなことしないで」と涙ぐんで言ったら、びっくりして僕に

「からかうつもりじゃなかったの。ゴメンなさい。秘密にして」と大枚を握らせてきた。

僕ごときを買うほどの性格やルックスではないのにと思いながら目を閉じ、唇を奪われて二回目を始めた。

勢いに任せて翌日には、

「僕とならやれるでしょ？」

「ええっ？そりゃ女の子は男の子となら誰だって……ええっ？」

「楽しもう楽しもう、ここ僕の敷地のホテルだから全然安心、問題なし」同じ部屋で唇の濡れた、学校一男の心を奪っていたＳＥＸＹな年下の女子の瑞々しいピンク色の処女膜を物申す暇も与えず奪い、それからも一週間日替わりで、それぞれに魅力のある女子たちと

エッチを楽しんだのだ。約半数の子はのっけから喜びを感じるほどに慣れていた。輝いている女の子を、モラルに厳しいふりをした大人は見逃さないことを、それで知った。

亜梨歌は半月後、

「あの時ごめんなさい」と身を寄せてきた。

亜梨歌の家は代々名主だったくらいだから、地縁を失い相続問題までのしかかった今でも必死でプライドを保っていた。だから彼女も田舎者の滑稽な言葉や振る舞いを陰では嘲笑されながら、スピードに限界のある昔話風の頭脳を無理に回し、一クラス４０人の一般大衆的生徒たちの前でたじろぎながら、健気に学級委員長として頑張っていたのだ。だがあらゆるハイレベルの女子を食い散らかした後、既に頬骨や顎が育ちすぎの感がある亜梨歌は、僕にとって未入居にして残存価値ゼロの粗悪物件だった。

むろん据え膳はとりあえず食うまでのこと、慣れきった手筋でおざなりに寝て、シーツに血の染みを付けながら苦痛に耐えた亜梨歌が

「捨てないで」とうっとり背中に縋ったとき、僕はうなだれて、大仰に沈んだ声で

「君と寝てると怖いんだ。限りなく落ちていく自分が見えて――ゴメン、もう会えない」

「ひどい。でもいい、私が悪いから」溢れ出るような悲しみを抑えた声でそう言った。

その言い逃れは、予想外に僕を縛った。ありったけののしらなかったことを後悔させるように、『失われた村』の学習にかこつけて、亜梨歌は何度も僕と接触し、そのたびに真面目な態度で許しを乞うた。

物凄い夕立の日、亜梨歌が勝負に出た。透明雨合羽を裸体にまとって僕の部屋の窓を見上げる亜梨歌の姿には、さすがに息が止まった。

「ねー、出迎えちゃやよ」と一線交えたあとの朦朧頭に響く、知り始め恵美のきんきん声が動揺を吹き飛ばす。

「知ってるさ」僕は、陰茎から溢れた体液を舐め取っている、大きい目で見上げる恵美に、僕のシャツを着せて黒いレインコートを持たせた。

「世間体があるからその服装はやめろって言ってきてよ」――敗者は黙って黒装束となり、背中を向けた。『君はこの雨の中で、湖やトラックに飛び込みすらしないだろうな』そう思った。亜梨歌の肌があれ、顔が歪み、せきをきって醜く褐色の少女になっていったのはそれからのことである。『ザマアミロ』ただそう思った。

8．葉月Ⅴ

「いつもお世話になって……」

駅前のコンビニエンスストアで売っている粗末な菓子折を持って、葉月を養っているおじいさんが僕を訪れてきた。

「あれを止めようにも仕事のほうがあって……全く私も愚妻ものろまでして」

むにゃむにゃと話し続けられるとかえって辛いので

「全然気にしないでください」と会話を打ち切らせ、下から飲み物を持ってくるために部屋を出た。いやと言うほど卑屈な物腰ではあったが、貧しい人々にはたいてい、それなりの事情があった。そういう人物はむしろ見慣れていたし、生まれた村の人々に対するような冷たい視線を向ける気は毛頭なかった。

「葉月さんも大変な運命を背負って生まれてきたんですね。でも、今までおじいさんたちに守られて、しっかりと生き抜いてきたんですねえ」

「いいえ……葉月は生まれつきの障害者などではありません」おじいさんは身を乗り出した。

「そんな楽な運命ではないのです、あの子が背負っているのは」

「葉月、実はもう、家にはお金がないんだよ」鼈甲の眼鏡と超高級スーツに身を包んだ、葉月の父親は欧米人風に肩をすくめて見せた。世界中どこにも存在しない、あの遠いバブル千年王国の住人……正確には、崩壊後の亡命貴族として。

「だから、君の腎臓を売らなければならないんだ」

葉月は悲しそうにうなだれ、その日のうちに海外に送られた。おなかの、今となっては小さな傷がふさがった時、今度は同じ飛行機に乗って長いまつげの奥の、右目の角膜を売った。代わりに入れてくれたガラス球の、それは実に二千倍の値がついたのだ。その次は偽装事故だった。スポーツが得意だった、細く締まった左の足首はトラックに潰され、夜逃げのための資金が調った。

最後は小さなアパートで行われた、脊髄の殴打だった。子供さえ重度の障害児に認定されれば、それをだしに年金がもらえるからだ。

「もう終わりだよね？もう終わりだよね？もう終わりだよね？」ハアハアと息を荒上げ、鉄棒を構えた、もうどこも見ていない目を持つ両親が自分を壊しやすいように不自由な足できちんと座り、見えざる何かに祈りながら葉月は叫び続けた。

「いい子だから、最後まで親を困らせることはせんかったのです」働きに働き抜いた傷だらけの手にぐっと力を入れて、おじいさんはうめいた。

「父親は娘からえぐり抜いた金で、何度も立ち直る機会を与えられました。しかし実際には生活を何一つ変えず、ただ娘をのみ、呪い抜いたのです。何と哀れな、弱い人間であったことか」

「で、どんな経緯で葉月さんを引き取られたのですか」

「わかりませんか？私どもが張本人です」

「あ……」もう、目をあわせられなかった。

「起訴されたとき、あの子は私たちと引き離されることを心から拒みました。刑務所に一緒に行く、と……ここまでしたのだから、もうこれ以上のことはしないはずだと。私たちはお情けで与えられた執行猶予の身で、昼も夜も働きました。骨が砕けるまで、ただ肉体を振り回しました。そうですね、ですから幸いもう親子には見られません。せいぜい孫だと……生き方の根本から変えた私どもを、別人のように老けさせたことを恐れ、憎み、そして感謝しているのです」

僕は父親の訪問を葉月に話さず、毎日のように葉月と抱き合った。体の向きとか、手の位置とか、二人だけの秘密のこつを共有して、しっとりと交わった。葉月は大きく開いた震える口に指先を入れて、僕の肌と陰茎を隅々までうっとりと味わい、時折けだものの匂いを漂わせてのぼりつめた。何度目かに僕がありったけのものを注ぎ込むと、激しい息をついて片脚をきつく巻きつけた。

「もう、葉月だけでいいな、僕」額の汗を唇で吸ってあげながら、ベッドの中でそう言った。

「あらあ？今付き合っている女の子とは簡単に別れられないんじゃなかったの？」僕の鼻先に人差し指を当てて、葉月は心から楽しそうに笑った。僕は葉月をきつく抱きしめて、それは世の中の話だと思った。もう、世の中なんて関係ない。

いや、そうでもないことがすぐにわかった。

9．亜梨歌、恵美、葉月、湖底の村

高校生活最後の秋の日に、狂おしい風が湖畔を吹き荒れる中、吊り橋に向かった。

あれから亜梨歌は歯を食いしばって再び立ち上がり、『旧谷野端村郷土芸能保存会』の

リーダーとなり、早朝から放課後まで、休日のすべてを使って失われたものに尽くし抜いた。表面上はただ、凛々しく前進していった。だが大人の美しささえ宿すその深い微笑みの奥に、どれほどの苦しみが積み重なっていただろう。いや、そもそも衰亡と、否定と、拒絶の最果てによろめく亜梨歌の中に、これ以上何が残されていたというのだろう。

つりばしの中央で、亜梨歌は一方的な宣言通り待っていた。何度もすっぽかしていたが、今回の呼び出しはなぜか無視できなかった。谷川の水音さえ聞こえない突風、谷を走り抜ける風はつり橋をぶらんこのように波打たせたが、もうそれを怖れるような年齢ではない。

「ここですよね。私が、あなたに決して許されないことをしたのは」何をするのかはわかっていて、亜梨歌がつりばしを降り、慎重に両手の指で縁にぶら下がるのを見守ってから近寄り、見下ろした。激しい雨と風が亜梨歌を揺らし、そのままでは一分も持たないようだった。

「あなたは私とは違う。引き上げてくれるよね。そして一言、好きと言ってくれるよね」

「負けた……」僕は苦笑いで亜梨歌を引き上げ――横殴りの暴風が一瞬で雨に濡れた手と手を滑らせ、払いのけた。落ちていく最初の瞬間は、物凄いスローモーションだった。

「いいの」亜梨歌は優しい瞳で僕を見た。そして一瞬で視界から消えた。

わざとしたように、数分後には青空が広がった。アナログの携帯電話にはサーサーうるさい雑音が入ったが、何とか繋がった。

三十メートルの谷底で、消防団と警察が組んだ捜索隊と一緒に、僕は彼女の小さな三つの部分を見つけた。当然流されているはずのものが、険しい岩でばらばらに切り裂かれ、一部だけが残っていたのだ。怖がりもせず、気持ち悪くも感じず、ただ秋の寒気にクリーム色を失い、青白くなった指のようなもの、耳のようなものを見つめた。

「亜梨歌さん、最後に許してくれました」

「何を許すのですか！ぼっちゃんを見殺しにしようとしたのでしょう」

傍らで捜索隊同士、

「あの村じゃああの息子、ずいぶん云われのない差別を受けていたらしいなあ」

「谷野端村は、結局そういうところだったんだよ」同じ意味の囁きを、旧村民まで一緒になって、終わりなくオスティナートしていた。

その程度なら強引に結論を導き出す大人たちの論理で片付けられた。だが告別式の受付

で記帳すると、亜梨歌の父親が慌てて顔を出し、会場に案内しながら自分の娘が何度も危険な場所に呼び出したこと、幼い頃に見殺しにしようとして、それを村が水没するまで一度も謝らなかったことをただひたすら陳謝し、

「もしお許し願えるのなら、ご焼香いただけませんか」と寂しく笑う姿を見て、一気に具合が悪くなった。

少しは冷静な母親のほうに、『亜梨歌さんが携わっていた谷野端村関連の保存活動はよろしかったらすべて引き継ぎますから』と手短に告げ、よりにもよって最も醜い時期に撮った遺影と向き合い、げんなりした気分で帰途に着いた。

国道の分岐点で、恵美が待ち構えていた。今度はこれだ。感情の入らないきんきん声でも、ご機嫌がよろしくないことはすぐにわかった。

「よりを……戻していたのね」

「いや、違うよ」怒りに息を切らして肩を怒らせ、燃え上がった瞳はもう、美しいなどというものではなかった。僕は何をされるのか予測がついていたのにぼんやりと少女の一度きりの輝きに見とれ、馬鹿のように突っ立っていた。

「女はね、愛する人の前じゃないと死ねない！私だって見せてあげる、今！でもね、あなたも死にながら見て！」ダレニモワタサナイというような意味の絶叫とともに、出刃がぐっさりと根元までわき腹に埋まった。『ところでこれ、生ものを切った後の包丁じゃないよね……』間抜けなことを考えながら体を折って倒れた僕を、あろうことか角を曲がってきたパトカーが拾い、

「あらあ、ぼっちゃんだ」と暢気な声を出しながら座席に引きずり込んだ。

「刺したのは女だなや」この土地特有の、野武士のようなごつい声が運転席から聞こえ、

『さすが警察、うがった見方をするよ』とつぶやきながら気絶した。

病床で看護師から、恵美が呼び止める巡査から逃げ出した足で、ためらいもなくトラックに体当たりしたのを知った。

「私も誘う？」お茶目な看護師は点滴を取り替えながらウインクした。

『気が強かったからなあ、実際……』白い天井を見ながら、当分女漁りはやめようと思った。数年間おとなしくして、資産家の息子としてお見合いをする日をただ待とうと思った。それこそ僕にとってのもう一つの死に他ならなかったが、詩的な表現はさておき、さすがに家の後継者である自分が余り死んではいけない部類の人間であることがわかってきたの

だ。

空白

二か月で何とか傷口を塞ぎ、家に戻った。

受験勉強のほうはかなり本腰を入れなくてはならない状況だった。父親にも事情を話し、まだまだ十人以上いる、小学生から人妻までの交際相手を断ち切るために、できるだけ遠くの大学に進学する必要があった。本当は気がかりな子が一人いて、絶えず胸がしくしく痛んだのだが、ほとぼりが冷めるまでは待っていてもらおう、それが彼女のためでもあると思った。

ドアホンが鳴った。そう、この子だ。これからもできるだけのことはしてあげたいけど、世間の目も大分厳しくなった今、君とさらに関係を重ねるのは厳しい。さあ、今は帰りなさい。今度双方の親も交えてしっかりした話をしよう。

迎えに出なかったら、葉月はゆっくりと、ステッキを突いて僕の部屋に上がってきた。ドアが開いた。お久しぶりでもなく、泣きじゃくるわけでもなく、昨日も会っていたかのような落ち着いた、気の強い微笑みだった。

「親から聞いたでしょ、私のこと」

「うん」

「内臓とるの苦しくなかったよ、麻酔打ったし。ただ足をタイヤで踏まれたのは痛かった。めりめりいって一瞬で壊れちゃった。やっぱ最悪だったのは背中の滅多打ちで、途中で痺れてきたけど、手元が狂って首に一発入ったの。いやこれひょっとして手元がどうとかじゃない、頭にもくるなって思って、腕で必死に守ったけどやっぱりきて、腕は裂けるし、しばらく鞭打ちでねー」

「やめてくれ！」僕は耳を覆ってうずくまった。

「ヤメない！」きっぱりと、強く、葉月は言った。

「今だけやめて！」

「ヤメない！」

「僕の話を――」

「ヤメない！」

やめないのか……並んで座った。

「ああ、二か月ぶり。愛しいなあ」葉月が僕の肩にぽてっと頭を乗せた。

「きみは今、退院したてで大変薬臭いのだ」

「……わからない」
「何があ？」
「だって、どうして君を壊した人と暮らせるんだ」
「暮らせるって、暮らすしかないじゃないよ」
「でもさ、それはそうかもしれないけどさ、殺されるかも――まあ今のあの人たちが君を殺すとはちょっと考えられないけどさ――知れないって思うと、夜も眠れないじゃない」
「じゃあ彼らには楽に刑務所暮らしをさせておいて、葉月だけ苦しむの？葉月の体を売って保った家族ですもの。当然でしょ、私の世話をしてくれて。そうね、葉月にした分以上に、彼らは苦しんだでしょうね。でもきっと今日、彼らの苦しみも終わる」どういうことだとは、尋ねられなかった。葉月はゆっくりと、曲がった指で自分のお腹を指した。
「産みます。長生きできなくても、この子が独り立ちするまでは生きます。父親のあなたと一緒に」
「……返事は、聞かないんだね」
「あなたもずうっと、傷だらけだったはずよ。じゃなきゃ、私も殺していたはず。あのお二人のように」
「う、うわあー！」真っ青になって勢いよく仰向けに倒れた僕を覗き込み、世間話でもするように
「私を殺せば楽になるのに。でも殺すべき相手ほど、ためらうんでしょ」耳の奥、重く静かな崩壊の音が近づいてきた。それは忘れていた、あの村の水没の記憶だった。葉月は僕の陰茎を手繰りだし、二三度勢いよく吸い上げて堅くしてから、喉の奥深くに僕をはめ込み、永遠に捕まえた。僕は悦楽に霞む視界に、深く紅葉した湖畔の山稜を映し、瞳を閉じた。

その山稜を見晴らす湖畔の広場に村人とここに故郷を持つ多くの人々が集まったあの日、十一才の僕はこっそりと崖下の岩陰に座って、死にゆく村を独り見守っていた。
村の水没のしかたは、実に心情に訴えるやり方だった。まず川ぶちで代々耕し抜いた、狭く細長い田畑が消えた。ついで身を寄せ合って立ち並ぶ古い家々の土台がやられた。ミリミリときなくさい音で軋む柱、出窓の薄いガラスの割れる弱々しい音、外れて水面に飛沫を上げる雨戸……そして家々は数分で真ん中が折れて落ちるか、菱形に歪んで倒れた。最も凄まじくズタズタによじれ、分解して陥没したのは、何度もの増改築で切り貼りされ

た木造の古い小中学校だった。

僕の胸はときめいた。何の感慨もなく、ただうきうきとときめいた。

高台に運悪く新築された数軒が、瞑目するようにおとなしく沈んでいく。モラルとしてはともかく、経済的には彼らとて主人に迷惑をかけなかった。時価の二倍もの補償金が出たのだから。その律儀さが痛々しさをいや増しにした。一段一段、沢の頂上に築かれた神社の石段を、死の水時計は徐々に上っていく。　中途の坂に築かれた宮司の屋敷が斜面からどっと崩れ落ち、屋敷の趣向にふさわしい派手な水飛沫を上げた。そしてゆっくりと、この村のアトモスフェアを支配し、僕を抑圧しつづけてきた大和の国の矮小な神々の一人が、永遠に消えた……僕はその瞬間、忌ま忌ましい谷底の裂け目に向けて生まれて初めての射精をした。老人たちの号泣のなか、僕は甘く深い満足に、ぐったりと岩陰に寝ころがった。

服装を整え、僕の精液を余さず吸い取った唇をティッシュで拭ってから、葉月は僕に軽いキスをして

「つわったら、こんなことさえできないよ。でも安定期になったらエッチだってできるからね。しばらく待っていて。今さら自殺なんてダメだよ」と耳打ちして、ステッキを驚くほど上手に使って階段を下りていった。